

日本には、養蜂家が飼育しているセイヨウミツバチと、野生種のニホンミツバチがいる。セイヨウミツバチは開国した明治時代にアメリカから輸入され、近代養蜂の技術と共に全国に広まった。特に富国強兵、殖産興業の時代では、軍馬の馬具の手入れや、大砲の砲身にも蜜蝋が使われた。蜜蝋を塗ると玉の滑りが良く遠くに飛ぶそう。

また、戦後すぐの砂糖が不足した時代にはハチミツも貴重品であった。日本の養蜂業はセイヨウミツバチを飼育してハチミツや蜜蝋を収穫し、授粉用のミツバチを供給することで成り立ってきた。その間、在来種のニホンミツバチは忘れ去られると同時に、むしろ養蜂家からは邪魔者扱いされることもあった。

私たちとニホンミツバチとの出会いは、銀座でセイヨウミツバチ飼育をはじめた年の4月末のことだ。区役所から「電柱にミツバチが群がっている。君たちのミツバチが逃げ出したのではないか？」と連絡があり、慌てて行ってみると、そこにいるのはニホンミツバチであった。これは自分たちの飼育しているミツバチではなく、皇居かどこかの公園で営巣しているニホンミツバチの分封群であることを説明すると、「それはどちらでもよいが捕獲するのか？そうでなければ連休も控えているので業者を呼んで駆除する」と言う。駆除さ

## ミツバチ目線で緑の街を③



# 福島豊かな森を守るため ミツバチ愛好家たちが結集

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト 最高顧問 高安和夫



福島県伊達郡国見町でのニホンミツバチの飼育講習会風景

れては可哀想なので、捕獲して屋上で飼育することにした。

そんな縁が発展して2010年、一般社団法人日本在来種ミツバチ協会(現トウヨウミツバチ協会)を設立した。その後、2013年に養蜂振興法が改正されニホンミツバチも法の対象となり、飼育技術の研究にも注目が集まりはじめた。それまで自然界の生物を研究する学者の間では、ミツバチ(セイヨウミツバチ)は家畜なので環境指標には成り得ないというのが定説であったが、ニホンミツバチは野生種なので環境指標になり得ると言って研究対象とする者も現れた。しかし残念なことに、ここ数十年

の間で開発や農薬、病気の発生による影響も含め全国的にニホンミツバチノ生息数が減少している。

### 事業紹介

NPO法人銀座ミツバチプロジェクトは、2006年3月から銀座のビルの屋上でミツバチ飼育を開始。ホテル、レストラン、百貨店など銀座の老舗と連携したハチミツ商品づくりや屋上緑化、地域の生産者との交流事業を通して街の活性化に貢献。平成22年6月環境大臣表彰。平成24年4月農林水産大臣より「食と地位の「絆」づくり」選定を受ける。

そうした中で、豊かな山河が広がる福島県からニホンミツバチが健在である知らせが届いた。梅雨入り前の6月2日、障がい者の就労支援をするNPO日本くらしの森ネットワークの阿部知浩理事長から招かれ、福島県伊達郡国見町を訪れた。阿部さんは農福連携の養蜂と里山再生を同時に進める私たちの活動に共感し、「福島には豊かな森と川がある。ニホンミツバチも県全域に営巣している。私たちはニホンミツバチ飼育で障がい者就労支援に取り組み、福島の豊かな森を守りたい」と話してくれた。

阿部さんの誘いに、地元のニホンミツバチ愛好家が結集しプロジェクトがスタートした。この日は開発した障がい者向けの小型巣箱や昇降リフトの講習と、今年捕獲した分封群の飼育状況を調査した。ミツバチたちは蜜や花粉を集めてどんどん帰って来る。蜜の溜まり具合も順調で、あと1か月程で最初の収穫もできるだろう。